２０２５．３．９（日）ルカ２３：１～１２

23:1 集まっていた彼ら全員は立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。
23:2 そしてイエスを訴え始めて、こう言った。「この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」
23:3 そこでピラトはイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは答えられた。「あなたがそう言っています。」
23:4 ピラトは祭司長たちや群衆に、「この人には、訴える理由が何も見つからない」と言った。
23:5 しかし彼らは、「この者は、ガリラヤから始めてここまで、ユダヤ全土で教えながら民衆を扇動しているのです」と言い張った。
23:6 それを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、
23:7 ヘロデの支配下にあると分かると、イエスをヘロデのところに送った。ヘロデもそのころ、エルサレムにいたのである。
23:8 ヘロデはイエスを見ると、非常に喜んだ。イエスのことを聞いていて、ずっと前から会いたいと思い、またイエスが行うしるしを何か見たいと望んでいたからである。
23:9 それで、いろいろと質問したが、イエスは何もお答えにならなかった。
23:10 祭司長たちと律法学者たちはその場にいて、イエスを激しく訴えていた。
23:11 ヘロデもまた、自分の兵士たちと一緒にイエスを侮辱したり、からかったりしてから、はでな衣を着せてピラトに送り返した。
23:12 この日、ヘロデとピラトは親しくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

＜説教＞

今年の教会暦で言う受難節（レント：これは Lent「春」、つまり日が「長くなる」lengthen 季節という意味）に入っています。「使徒の働き」からの説教を少しお休みして、同じ著者ルカの「第一巻」である「ルカの福音書」の 23 章から始めて私たちの主イエス・キリストの受難、つまり十字架の死、そして復活について学んでいきます。場面はイエスが十字架にお架かりになる当日（金曜日）の夜明け（22:6）から始まります。

〈集まっていた彼ら全員は立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った〉（23:1）。この〈集まっていた彼ら全員〉とは〈民の長老会、祭司長たちや律法学者たち…彼らの最高法院〉（22:66）の全員のことです。彼らはそのユダヤ人の最高法院でイエスを「自分は神の子だと言って神を冒涜した」という神冒涜罪に定めていました（22:67−71）。ユダヤ人（ユダヤ教）では神冒涜は死刑に当たる罪です。彼らは〈イエスを死刑にするために協議し〉（マタイ 27:1）、イエスをピラトのもとに連れて行きました（1）。〈ピラト〉とは当時ユダヤの総督だったポンティオ･ピラトです（3:1）。普段はカイサリアに駐在していましたが、このときはユダヤ人の「過越の祭り」のために非常に大勢のユダヤ人がエルサレムに集まっていたので、特別警戒のためにピラト自身もエルサレムに来ていました。

そのピラトにユダヤ最高法院がイエスを犯罪人として訴えました（2）。しかしこの訴えには彼らがイエスに見出した「神冒涜」罪のことは（少なくとも直接には）触れていません。強調されているのは、イエスがローマ皇帝に反逆する者で、ユダヤ人をローマ皇帝に

反逆するように人々をそそのかしているということです。神冒涜というユダヤ教の罪を訴えてもローマ皇帝から派遣された総督はなかなか取り合わないということを最高法院は分かってきていたようです。後に「使徒の働き」に出てくるアカイアの地方総督ガリオも、パウロが律法に反するやり方で神を拝むように人々をそそのかしているとのユダヤ人たち訴えを退けています(使徒 18:12−16)。それで、イエスを死刑にしてもらうためには何としても「ローマ帝国への反逆者」としてイエスを訴える必要がありました。それで「この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」と訴えました。もちろん、彼らがこの訴えで、〈わが民〉即ちユダヤ人民衆の益（本当の意味で）を考え願っていたわけではありません。またローマ帝国の益、総督たちの益を考え願っていたのでもありません。彼らのうちにあったのは「何としてもイエスを死刑にする」ということ、それだけでした。彼ら自身、自分たちの訴えがでたらめであることが内心では分かっていたと思います。しかし「イエス憎し、嫉まし」の思いで心が満たされた彼らはもう自分たちの暴走を止めることができませんでした。

ピラトも伊達に総督に任命され、仕事をていたのではないでしょう。ユダヤの総督として、裁判官としての職務を果たそうとし、イエスを尋問しました(3)。彼は最高法院の訴えの中の、イエスが「わが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ」ているという点については触れもしません。これまで総督として仕事をしている中で、イエスがそのようなことをしているという報告はそもそも入って来ていなかったからでしょう。ピラトはユダヤ最高法院の「嘘」を即座に見抜きました。それで確かめるべきことは、「自分はユダヤ人の王キリストだと言っている」ということの一点だけでした。もしイエスがローマ皇帝に代わって、または皇帝から任命された総督に代わってユダヤ人を支配しようとしているなら確かに問題です。そんなピラトの問いに対するイエスの答えは「あなたがそう言っています」でした。このイエスの答えの意味は「ヨハネの福音書」に記されています。〈イエスは答えられた。「あなたは、そのことを自分で言っているのですか。それともわたしのことを、ほかの人々があなたに話したのですか。」〉（ヨハネ 18:34）と。つまり「イエスがどういうお方なのか」、それはあなた自身の責任で、自分で判断し、結論すべきだということでした。そしてそのヨハネの福音書で続けて明らかにされることは、「あなたはユダヤ人の王なのか」という問いは即ち「真理とは何なのか」（ヨハネ 18:36）という問いだということです。つまり「イエスがユダヤ人の王なのかどうか」という問題は、本質的にはローマ皇帝や総督に反逆するとかしないとかという「政治的」問題ではなく、「真の信仰」の問題だということになります。もちろんその先には「信仰の故に皇帝や総督に従う、または従わない」という問題が当然起こるわけですが。

さて、そういうわけでイエスには「政治的罪」もないこと、そしてユダヤ人たちの訴えの不当がピラトにははっきりしたので、ピラトはイエスに対する訴えをピラトは退けました(4)。イエスは無罪だと総督として公式に宣言したのです。

このピラト判決を受け入れないユダヤ最高法院は、しつこくピラトに迫りました。イエスの悪事はピラトの管轄外のガリラヤから始まり、今やユダヤ全土に及んでいると言い張りました(5)。確かにイエスはガリラヤで育ち、ガリラヤで宣教を始めました。

ピラトはイエスを無罪と認め、ユダヤ人たちの訴えを退けましたが、それは決して「イエスをキリストと信じる信仰の良心」からの事ではありませんでした。本音はこれ以上イ

エスとは関わりたくない、ユダヤ人たちの機嫌も損ねたくない、穏便に事を収めて自分の地位を守りたいということでした。イエスがガリラヤ人なら、ガリラヤの領主のヘロデ（アンティパス）に「丸投げ」してしまおうとしたのでした(6−7)。

そのヘロデはピラト以上に「俗物」で、「真理とは何か」と問うことさえなく、自分の欲望の満足だけを求めていた人物でした(8)。故にイエスはヘロデの多くの質問に一つもお答えになりませんでした(9)。その結果、祭司長たちや律法学者たちのしつこい訴えにもかかわらず、領主ヘロデによっても公式にイエスは罪に定められませんでした。ただし、屈辱を甘んじて受け、それを耐え忍ばれました(10-11)。

こうしてイエスにはユダヤ人最高法院が訴えたような罪が何一つないことが、総督ピラトによってだけでなく、領主ヘロデによっても明らかにされました。このことはすぐ後でピラトが主張します(14−15)。こうしてイエスは全く何一つ罪を犯さなかったにもかかわらず、十字架の死に向かって歩んで行かれました。それは何故か。使徒ペテロは言います。〈キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた〉（Ⅰペテロ 2:22−24a)。

イエスをキリスト信じないで、憎み嫉んで殺そうとして訴えたユダヤ人最高法院のような人々、またイエスを無罪と認めつつ、イエスに問いつつもイエスをユダヤ人たちに引き渡した（そのことはこの後見ます）ピラト、そしてヘロデ。今もそのような人々の多いこの世にあって、私たちはつい惑わされ、ひるみ、臆病になってしまう弱いものです。しかし、イエスを私たちのそんな罪からの救い主として信じ、従うように今日も神は招いておられます。この恵み深い神の招きに信仰と感謝と喜びをもって応答したいと願います。